

コキマダラセセリ *Ochlodes venatus* (Bremer et Grey)

【選定理由】

愛知県では1951年に北設楽郡豊根村茶臼山で初めて記録されて以来、旧稲武町（現豊田市）など僅かな記録しかなかったが、2000年代に入り北設楽郡豊根村、豊田市大野瀬町で継続的発生が確認された。しかし、近接する岐阜県東濃地方などでは、近年激減が報告されており、同じ生息圏内の減少と考えられる。

【形態】

前翅長16～18mm前後。♂の前翅地色は橙色で、中室下縁に黒い性標が目立つ。前翅の外縁、後翅の周辺は黒褐色の縁取りが強いものから弱いものまで変異が大きい。♀の表面は全体に暗褐色、亜外縁の橙黄色の斑紋が弧状に並ぶ。同属のヒメキマダラセセリに似るが、本種の方が大きく、裏面の翅脈が細く不明瞭であることから区別は容易である。また、別属のアカセセリ（愛知県からは未記録、コキマダラセセリに比し、発生期がやや遅い）に類似するので注意が必要である。アカセセリは、♂の性標の中心に銀白色の鱗粉があり、♀では前翅表面第2室の基部に斑紋がない。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県での確実な報告は、北設楽郡豊根村（茶臼山、坂宇場）、旧稲武町（現豊田市大野瀬町三国山池ヶ平牧場付近）のみであった。このほか、豊田市滝脇町からトラップにかかったという個体が報告されているが、同定者が不明、標本も現存せず、保留としたい（高橋・村瀬, 2007）。近隣の岐阜県東濃地方の低山地からはいくつかの報告があり、丘陵地の湿地やその周辺の草地から記録されているが、隣接する愛知県の丘陵地や旧作手村などの三河高原からはこれまで報告がない。

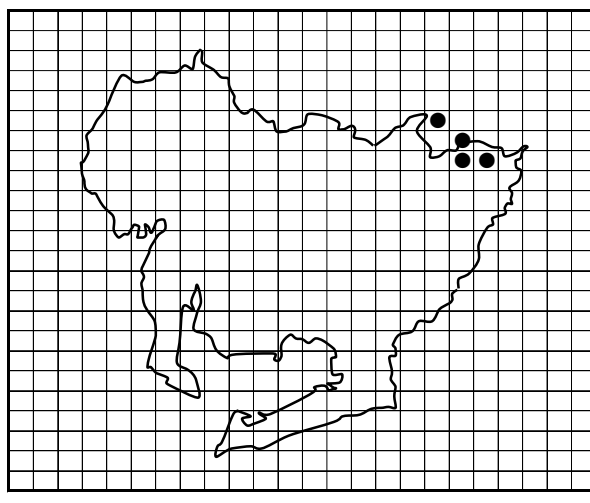
【国内の分布】

北海道、本州に分布する。北海道では平野部に普通に見られ、本州では東北地方から山口県まで山地に分布するが、近畿地方には広い分布空白地がある。東濃地方の低標高の産地は例外的である。

【世界の分布】

国外ではヨーロッパから日本までユーラシア大陸に分布する。しかし、すべて同一種かについては今後の検討が必要である。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

一般に明るく広いススキが多い草原を好む。北海道では路傍などの草地にも生息する。岐阜県東濃地方では湿地との結びつきが強く、同様な傾向は中国山地にも見られる。これらの産地ではヒメヒカゲやゴマシジミを産するところが多い。年1回の発生。湿地性の三国山では6月下旬～7月上旬。草原性の茶臼山では、8月上旬前後に最盛期を迎え、発生時期には1ヵ月近い差がある。♀はやや遅れて羽化する。天気の良い時に、明るい草原上を敏捷に飛び、各種の草花を訪れる。各種のイネ科植物に産卵し、中齢幼虫で越冬する。越冬後の老熟幼虫はススキから見出されることが多い。草刈りなどによって維持されている場所では比較的個体数が多いものの、草地の管理放棄などによる環境の悪化によって生息地は限定される。

【現在の生息状況／減少の要因】

豊田市大野瀬町三国山池ヶ平では、湿性草原およびその周辺草地から見いだされ、東濃地方と同様湿原との結びつきが強い。一方、北設楽郡豊根村坂宇場（茶臼山、萩太郎山など）では、長野県で多く見られる明るく広いススキが混在した草原に依存している。茶臼山では、牧場の一部が利用されなくなり、クマザサなどの繁茂から草地が狭くなり個体数を減じている。また、萩太郎山では、スキー場等観光目的に利用されているため草刈りが行われ草地が維持されているが、経年の草刈りによりアザミ、マツムシソウなどの吸蜜植物が激減し個体数を減じている。1951年に茶臼山で初めて記録されて以来、1957～1970年に北設楽郡豊根村の一部の地で少数の記録があるに過ぎなかったが、1993年7月に北設楽郡稲武町（現豊田市大野瀬町）池ヶ平牧場跡地で新たに生息が報告され、2006年7月4日に数頭を採集確認した（高橋昭・田中蕃, 未発表）。2019年7月8日現地、チョウ類調査を実施し、1個体を確認した。

【保全上の留意点】

湿地の保全、草地の適度の草刈りなど生息地の保全が最も重要である。

【特記事項】

自然状態での産卵植物、幼虫、蛹の観察例は日本全体でもごく少ない。

【引用文献】

高橋 昭・村瀬卓平, 2007. 愛知・長野県境茶臼山のコキマダラセセリ. 蝶研フィールド, 22 (4): 16-17.

(2009年版を一部修正)